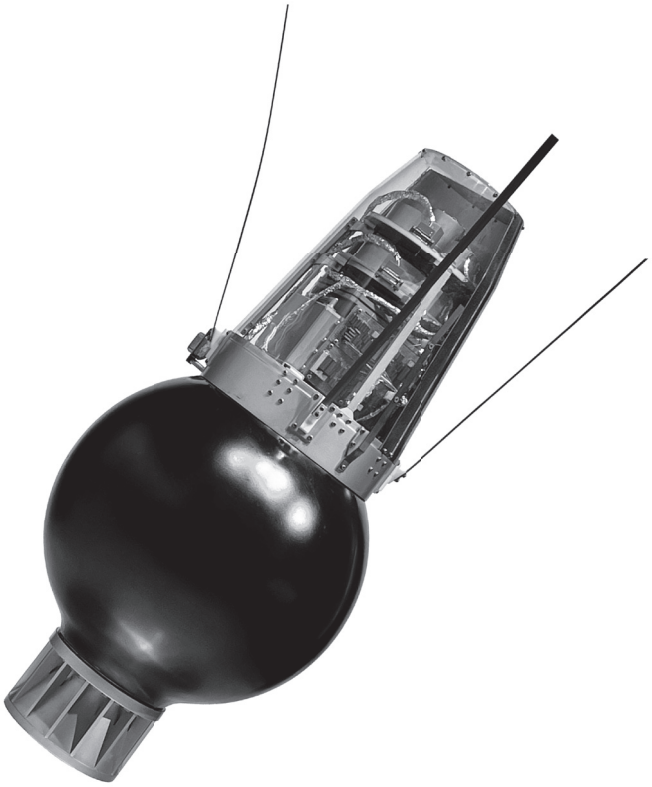
あるむぜお

府中市郷土の森博物館だより
al museo
2026年9月20日
No.157



日本初の人工衛星「おおすみ」模型
所蔵：NEC

もくじ

1-2 フチュウで はたらく ウチュウ人
その２…人工衛星ツクール星人
3 展示会案内
復元建物展示　土蔵造りのお店屋さん
4-5 NOTE
火防の御利益と府中の秋葉信仰
6 series　収蔵庫のニューフェース
常久八幡神社の大太鼓新調記念品
7 最近の発掘調査
清水が丘遺跡における新発見
8 お札からみる府中
②現在では入手困難　江戸時代に発行されたお札

フチュウで はたらく ウチュウ人

府中市内には、宇宙に関わる仕事や活動をしている「ウチュウ人」がたくさんいます。「星空ツクール星人」、「人工衛星ツクール星人」、「人工衛星ササエール星人」、「宇宙マモール星人」にまつわるエピソードを４回シリーズで紹介します。

その２…人工衛星ツクール星人

府中市日新町。ここに日本の人工衛星の設計、製造、運用などを行う一大拠点があります。フチュウではたらくウチュウ人たちの中でも、最大勢力といってよい、そのウチュウ人の名は「人工衛星ツクール星人」。しかしその実態は、「人工衛星ナンデモスル星人」なのです。

フチュウで はたらく ウチュウ人

その２…つくるだけじゃない！「人工衛星ツクール星人」



「人工衛星ツクール星人」の地球での姿は、日本電気株式会社及び関連グループ会社の社員。一般的には、「NEC」と呼んだ方がよく知られているかもしれません。NEC といえば、身近なものではパソコンや通信、ネットワーク機器の開発・製造・管理を行い、大きなものでは AI やサイバーセキュリティなども扱う、日本を代表する総合電機・IT 企業です。かつては家電やゲーム機などもつくっていた幅広い実績があります。

その最前線の現場が宇宙。府中で彼らは人工衛星をつくっているのです。「人工衛星」とは、広義には宇宙に打ち出された人工のものすべてですが、その役割や用途はそれぞれ違います。人工衛星ツクール星人は、実に様々な人工衛星をつくってきました。

まずは、日本初となる人工衛星「おおすみ」（表紙参照）。1970 年（昭和 45）に地球を周回したこの衛星の開発・製造を担当しました。日本の宇宙開発の幕開けから関わっていたことになります。

また、気象や災害などのデータを集める衛星「ASNARO」シリーズ。光学センサやレーダーなどを装備し、地球を見つめ続けるこの衛星を、人工衛星ツクール星人は自社で保有しています。

そして、日本でもっとも有名かもしれない探査機「はやぶさ」「はやぶさ 2」。ドラマチックな小惑星探査を行ったこの名機も、人工衛星ツクール星人がシステム製造を担当していました。

さらに、今年の 8 月に 7 号機が打ち上げられた「みちびき」シリーズ。今や暮らしに欠かせない、スマートフォンやカーナビゲーションシステムにも活用される、測位、位置情報の提供を支える衛星です。誤差数センチメートルの精度で測位が可能といいます。初号機から一貫して、人工衛星ツクール星人が、心臓部となる測位の装置を開発・製造しています。



特別展で展示された人工衛星の模型たち。使途に応じて設計されるその形状は様々。 所蔵：NEC

一口に人工衛星といっても、その中身は、地球を周回しカメラで地上を撮影するものや、利用者に位置情報を伝えるもの、あるいは地球を離れ別の星に軌道を向けるもの、さらにもっと遠くの宇宙を観測するものなど様々で、開発や製造には都度違った技術が求められます。

ページ上部にあるイラストは、特別展「フチュウで はたらく ウチュウ人」にあたり、人工衛星ツクール星人をイメージして制作されたものですが、阿修羅像のように 6 本腕としました。人工衛星ツクール星人が行っている宇宙事業は、単につくることに留まらず、「研究、開発」をし、「製造」をして宇宙に送りだした後、管制し、データ収集などを行う「運用」までも担っており、さらにそれらによって得られる恩恵を、私たちの生活に生かす「サービス」まで視野に入れています。これだけたくさんの役割を果たすには手が足りないだろうということで、バリバリ働く人工衛星ツクール星人には 6 本腕になってもらいました。

「宇宙開発」という言葉からは、なにかコンピュータやロボットがスマートに問題を解決しているように思えるかもしれませんが、その製造工程には、「職人技」とも呼ぶべき手作業が驚くほど多く用いられ、歴史ある企業の底力はやはり人間の技術力なのだと実感させられます。

これからも人工衛星ツクール星人は、様々な人工衛星を宇宙に送りだすことでしょう。人工衛星が光りながら夜空をゆっくり横切る姿は、地上からも肉眼でしばしば見られます。次にあなたが見る、空を渡っていく人工衛星は、もしかしたらフチュウでウチュウ人が組み立てた人工衛星かもしれません。

（小林善紹）

復元建物展示

土蔵造りのお店屋さん

開催中～ 2027/3/31（水）　　会場：園内 旧島田家住宅

当館園内に移築・復元された「旧島田家住宅」は、1888 年（明治 21）に建てられたお店屋さんの店舗部分です。元は現在の旧甲州街道沿いにあった建物で、外面の壁を何層もの土と漆喰で覆う「土蔵造り」という建築技法で造られているのが特徴です。

土蔵造りは、その名の通り、物を保管する土蔵を建てるときに用いられます。商人にとって蔵は、家財道具に加えて商品を守るために必要でした。しかし、消火技術が整っていない時代は、火事が起こると延焼が生じやすく、度々大きな被害につながりました。お店や商品を守るべく、耐火性のある「土蔵造り」を用いた蔵が、江戸・東京から各地に広まったのです。

また、蔵だけなくお店も土蔵造りを用いた「店蔵（見世蔵）」が、江戸・東京で建てられるようになりました。やがて各地でも建てられるようになり、ここ府中も旧甲州街道沿いにいくつもの店蔵があったようです。

土蔵造りの建物は、窓や入口に分厚い観音開扉がついています。火事が起こると出入りの左官職人が駆け付け、扉を閉めてできるわずかなすき間にも土を塗って建物を密閉しました。また、店蔵の正面は出入りのために広くとられているので、観音開扉ではなく、漆喰で塗り固めた土戸を出してふさぎました。島田家の店蔵でも、移築される前は塗り込み用の土を入れた甕が建物のそばに用意されていたそうです。



会場の旧島田家住宅


室内に再現した薬屋さんの様子

ところで、島田家は何屋さんだったのでしょうか。屋根に現在掲げている看板をみると「島田薬舗」とあり、薬屋さんだとわかります。しかし、元は江戸時代から続く金物屋さんでした。薬屋さんを兼業したのは、1834 年（天保 5）からです。ほかに定規や秤などの販売や修理もしていました。

それが 1928 年（昭和 3）に金物の商いを辞めてしまいます。それ以降は薬を中心に扱うようになり、あわせて店の内装も大きく変えていったのです。島田家は建替えのために解体される 1982 年まで、この店蔵で営業を続けました。解体された部材は当館の敷地に運ばれ、1985 年から足掛け 3 年かけて創建当時の姿に復元する工事が行われたのでした。

本展示会は、土蔵造りと店蔵の特徴、島田家の来歴、営んでいた商売について紹介しています。また、金物屋さんと薬屋さんを兼業していた、大正時代から昭和初期頃のお店の様子を再現しています。展示を通して、いまでは珍しくなった店蔵や、そこで商売していたお店屋さんのことを知っていただけると幸いです。　（荒 一能）

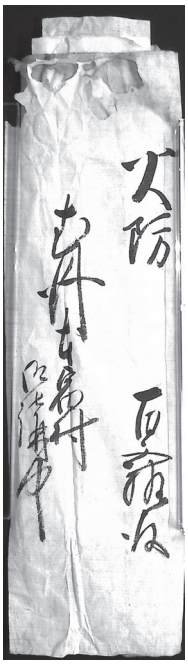
NOTE

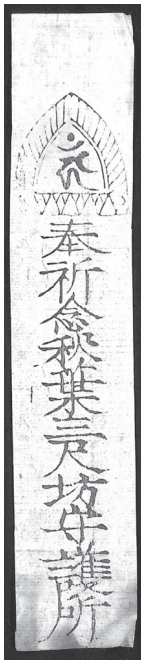
火防の御利益と府中の秋葉信仰

佐藤　智敬



寛政４年建立、本宿交番前交差点（本宿町）にある「秋葉大権現」と彫られた常夜灯





「火防 百五拾枚」（お札の数と思われる）と記した封筒と、封入されていた「秋葉三尺坊」のお札



狐に乗った秋葉権現を描いた「遠州　秋葉山」（静岡県浜松市）のお札

▼ 火災除け（火防）はとても重要なお願い

木造建築が大半で、水道も消防車もなかった江戸時代、一度火災が起こればその被害は甚大なものになりました。それゆえ、人々は火防（火伏）の御利益のある神仏をまつる寺社を信仰し、火事が起こらないよう祈りました。

火伏の御利益のある寺社は全国に多くあります。江戸時代の府中あたりでは、愛宕山（京都府 / 愛宕神社、大善院等）、秋葉山（静岡県 / 秋葉神社、秋葉寺等）などが信仰されていました。

明治以降にはこれに加えて古峯神社（栃木県）への信仰が盛んになり、現在でも市域の一部で古峯（古峰）講が継続されています。その逆に愛宕、秋葉への信仰は現在ほぼ途絶えてしまっています。ここでは江戸時代の資料を通して、市内旧本宿村（本宿町、美好町、西府町等）に残された秋葉信仰の痕跡をたどってみましょう。

▼ 秋葉権現とその信仰

府中市域には「秋葉山」「秋葉大権現」などと彫られた常夜灯が６基確認されています。このうち、現本宿町にある寛政４年（1792）に造られた常夜灯では、昭和初期まで当番が火を灯していたといいます。そして、かつては秋葉講を結成し、秋葉山に参詣したり、逆に御師がお札を配りに来たりしていたようです。旧本宿村の内藤清兵衛家（美好町 / 以下「内藤家」）で発見されたお札群には、秋葉山で発行された「三尺坊」のお札や、「火防」の文字とともにお札を 150 枚封入したことを記す（内部には９枚しか残されていませんでしたが）発行年代不詳の封筒がありました。１軒の家で使用するにはあまりにも多い数なので、村中に配布する前提でまとめて受けたものだと思われます。なお、内藤家からは種類が異なるものも含め、秋葉山発行のお札が 100 枚以上見つかっています。

▼ 唯念上人筆、「龍」と記された火防の札

さらに、秋葉山が発行したものではないですが、内藤家からは墨で「龍」と大きく記された、木製の防火盗（火事、盗難防止）および厄除を祈るお札が２枚発見されています。印刷でなく手書きのもので、安政５年（1858）２月と、翌６年２月に作製されたことが分かります。

このうち、安政５年のものには、いぶされた煤

で一部判読しづらいですが、表面の龍の字の上部に、右から「熊野×××××（三社大権現か）」（本宿村の鎮守）、「秋葉山×××（大権現か）」、「六社大明神」（六所宮＝現大國魂神社の通称）、「富士浅間大菩薩」（富士山 / 浅間神社は旧本宿村内にもあるほか、富士講も結成されていたと思われる）、「大山石尊大権現」（現在の大山阿夫利神社等、市内では現在も大山講が継続）、「日本国中大聖神祇」（日本中の神々という意味か）とあります。下部には小さく「唯念」とあり、裏面には特徴的な筆致で「×（南か）無阿弥陀仏」と記されています。

こうしたことから、このお札は、江戸後期～明治初期に活動した念仏僧・唯念上人（1791 ～ 1880）作と考えられます。唯念上人は現在の静岡県、神奈川県、山梨県等で活動し、各地に「南無阿弥陀仏」と記した名号碑を造立したり、水に関連して火防のご利益があると広く信じられていた「龍」の文字を、今回紹介したお札のように独特な筆致で表現した書をしたためたりしたことで知られています。

次に安政 6 年に記された木札を見ると、同じく絵画のような「龍」の字がメインとなっていますが、表面の上部は前年のものと一部異なり、右から「正一位稲荷大明神」（家内の稲荷神社か）、「石尊大権現」、「熊野三社大権現」、「金毘羅大権現」（本町の妙光院境内にある金毘羅堂のことか）、「秋葉山大権現」と記されています。表面には同じく「唯念」と記され、裏面にも「防火盗厄難除」「唯念」「齢六拾八歳」等の記載があります。唯念上人は寛政 3 年（1791）生まれなので、安政 6 年（1859）に 68 歳という年齢も合致します。

唯念上人のお札は、鎮守である熊野三社大権現、火防の御利益で信仰していた秋葉山大権現など、内藤家が信仰する神仏名を「龍」の字とともに記し、オーダーメイドで作製されたと推測できます。ちなみに、内藤家には唯念上人筆と思われる、「龍」の字の上部に「弁財天」など別の書き込みがある紙製のお札や、「防火盗」等と記された書も複数枚残されていました。なお、これらは東京都内で初めて確認された唯念上人の足跡のようです。

▼ 姿を消した秋葉信仰の謎

府中市に隣接する多摩市や小金井市には秋葉神社がありますが、現在の府中では、秋葉の名前を常夜灯以外に見ることはほぼありません。御師の往来もなく、代表者を派遣して代参したという伝聞すら聞くことがありません。しかし市内では、内藤家以外でも時折秋葉信仰の古いお札が発見されることがあります。なぜそれらがまつられることになり、どのように信仰し、どうして失われてしまったのか、その詳細は不明ですが、今後こうした事例を集めることで、謎が解明されていくことに期待したいと思います。



安政 5 年 唯念上人筆木製お札（表面と裏面）
表面上部中央には「六社大明神」。煤で読み取りにくいが、その右に「秋葉山×××」。裏面に「×（南か）無阿弥陀仏」などとある。



安政 6 年 唯念上人筆木製お札（表面と裏面）
表面上部の中央には「熊野三社大権現」（本宿村鎮守）とあり、左端に「秋葉山大権現」とある。裏面には「防火盗厄難除」などとある。

series 収蔵庫のニューフェース

常久八幡神社の大太鼓新調記念品【民俗】

府中といえば、大國魂神社の例大祭・くらやみ祭が有名です。そこでひときわ目を引くのが、人の背たけよりも高い 6 張の大太鼓でしょう。なかには面の口径が 200cm に及ぶものもあります。

大太鼓の歴史は思ったより新しく、江戸時代のくらやみ祭では、2 人で担いで運べる大きさの太鼓が使われていました。また、数も 2 張しかありませんでした。明治時代になると、台車でなくては運べない大きさの太鼓が造られるようになり、その数も増えました。さらに昭和の終わりから平成の初めにかけて、より大きな太鼓への新調が行われたのです。

こうした太鼓の巨大化は、市内の鎮守にも影響を及ぼし、それぞれ大太鼓が新調されるようになりました。そのため、現在では鎮守のお祭などでも、大太鼓の大音響が聞こえるようになっています。

そのような鎮守の大太鼓に関わる資料を寄贈いただきましたので、ニューフェースとしてご紹介します（2025 年個人寄贈 / 右上写真）。

その資料は、1993 年（平成 5）に常久（現 若松町）の鎮守である常久八幡神社の大太鼓を新調した際に造られた記念品です。記念品といっても、叩くと音が鳴る、ちゃんとした太鼓です。口径は 17.5cm、全体の高さは 35cm あります。

一方、新調した大太鼓（右下写真）はというと、口径は 152cm、台車を含めた高さは 253cm あります。大太鼓のそばにいる人と比べると、その大きさがよくわかります。

資料（記念品）の胴をみてみると、「奉納　八幡神社」、「御成婚記念　常久氏子中　平成五年十月」と書かれています。これは大太鼓の胴に記されたものと同文です。そこから、この資料が新調した大太鼓を模していることがわかります。ちなみに御成婚記念とあるのは、同年にいまの天皇・皇后が結婚したことによるものです。

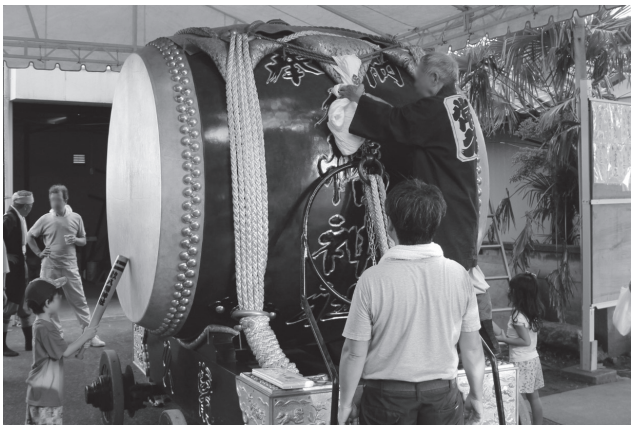
なお、本資料と似た記念品は、ほかの鎮守でも造られていました。例えば、常久の東側に位置する上染屋（現 白糸台）の鎮守である上染屋八幡神社は、1991 年に大太鼓を新調しています。それに関わった氏子によると、新しい大太鼓を依頼した太鼓屋で小さな太鼓をみかけ、それを大太鼓新調の記念品にしようという話が持ち上がり、購入を希望した氏子へ配ったそうです。

このことから、常久八幡神社が大太鼓を新調する 2 年前には、大太鼓を模したミニチュアを造って新調記念品とすることが、すでに行われていたとわかります。それが常久八幡神社でも行われたのでしょう。こうした事例を踏まえると、鎮守同士のネットワークが浮かび上がってきそうです。

（荒 一能）



ニューフェースの常久八幡神社の大太鼓新調記念品



常久八幡神社の大太鼓

最近の発掘調査

清水が丘遺跡における新発見

清水が丘1丁目　府中市ふるさと文化財課　谷口　広大



出土した丸石

府中市では、現在までに 2,000 回以上の埋蔵文化財発掘調査をおこなっています。そのなかで、今回紹介するのは、京王線東府中駅の東側に広がる清水が丘遺跡での新発見についてです。

調査地は、東府中駅から南東へ約 260m 離れた場所で、縄文時代中期（約 5000 年前）における集落の一画です。こちらで調査を進めるなかで、注目すべき発見がありました。今回の調査では、「丸石」と呼ばれる縄文時代の遺物が出土しましたが、これは府中市内で初めてのことです。丸石は山梨県や長野県での出土報告が多い遺物ですが、用途が明確にはなっていません。そのなかで、中期では竪穴建物跡内での出土例が多く、石棒・埋甕などの祭祀的な性格が強い遺物との関連があることなどが検討されている遺物です。

今回出土した丸石は、長軸 18.8cm、短軸 16.9cm、最大厚 12.7cm で、重量は 5.75kg あり、形状から受ける印象は、ダチョウの卵のようです。また、竪穴建物跡からの出土ではなく、他の遺物を伴っているわけでもありません。石の表面は全体的に摩滅しているものの、被熱の痕跡や人為的に加工されたことを示す痕跡は目視では確認できませんでした。しかし、表面に触れてみると摩滅の具合が箇所によってわずかに異なることがわかりました。写真のように据えた場合、その上面と下面がとくに摩滅しています。この摩滅は、川などの水の作用による可能性が考えられるほか、当時の人々による丸石の使用や整形の過程で生じた可能性が考えられます。

このように、今回得られた情報のみでは丸石の具体的な用途にまで言及することはできませんでした。しかし、丸石は遺物として注目されにくかったこともあり、これまで市内での確認例がなかったため、今回の出土は重要な発見です。発掘調査の時点では情報が少ない遺構・遺物であっても、調査を積み重ねることで新たな発見や理解につながることが多くあります。丸石についても、今後の調査で情報が蓄積され、用途などが明らかになることが待たれます。



調査地点
（地理院地図「淡色地図」に加筆）

お札からみる府中

②現在では入手困難 江戸時代に発行されたお札

旧本宿村、内藤清兵衛家（美好町 / 以下「内藤家」）の屋根裏から発見された 7,000 枚以上のお札群には、江戸時代に発行されたと考えられるものがいくつもありました。分かりやすい例は、大國魂神社（宮町）が江戸時代以前に名乗っていた「六所宮」と記されたお札です。六所宮発行と思われるお札は約 180 点あり、複数の種類が確認できました。

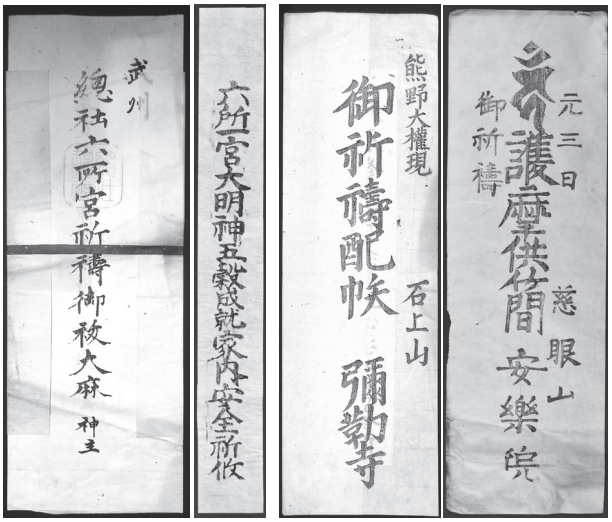
また、内藤家が所属していた旧本宿村には、江戸時代、弥勒寺（真言宗）、安楽院（修験）という 2 つの寺院がありました。明治時代にはこれらの寺院は廃寺となり、現在その姿はありません。その失われた寺院が発行したお札も複数残されていました。

ところで、寺社では「□□明神」「○○権現」といった祭神名を目にすることがあります。お札群には「明神」「権現」と記されたものが多種あり、大半が江戸時代の発行と思われます。

「明神」「大明神」は、平安時代には有力神社の呼び名でしたが、徐々に仏教とも関連すると認識され、江戸時代には様々な神仏の名称として知られていました。南北朝時代成立とされる『神道集』にも「六所大明神」と記されています。六所宮が正式名称であったのに、現在でも一部の人々には「六所（六社）明神」で通じます。その名が記されたお札は、六所宮発行のものでは見つかっていません。

ただし、小野神社（多摩市）では、六所宮との関係性からあえて「六所一宮大明神」と記したお札が発行されていました。六所宮は武蔵国の一之宮から六之宮をまつり、小野神社が一之宮だといわれています。六所宮の祭神が「大明神」と表記されていた例といえるでしょう。

「権現」「大権現」も、神仏の名称として知られていました。仏教の仏様が神道の神様の姿になって現れる（またはその逆）＝神仏習合という考え方に基づいています。内藤家には、「熊野大権現」と名前が入った、前述の弥勒寺が発行したお札が残されていました。鎮守である熊野神社（本宿町）が、かつては熊野大権現と呼ばれており、別当寺として弥勒寺が管理運営にかかわっていたためです。



左から「六所宮」（現・大國魂神社）、「六所一宮大明神」（現･小野神社）、「熊野大権現　弥勒寺」、「安楽院」と記されたお札。弥勒寺と安楽院は現在廃寺だがいずれも現本宿町にあった寺院。これらのお札はすべて内藤清兵衛家（美好町）屋根裏で発見されたもの。

慶応４年（1868）３月、政府の出した神仏分離令以降、神社と寺院は基本的に分離されました。神仏を積極的に分離しなかった修験道の寺社など例外はありましたが、祭神名は「大神」、社名は「神社」などに改称され、「明神」「権現」という名称の大半は姿を消していきました。

しかし、完全に消えてはいません。例えば、家にまつられている稲荷の祠に「正一位稲荷大明神」と記した紙の幟旗を奉納する風習が府中市内に残っています。境内の鎮守として「稲荷大明神」をまつる寺院もあります。江戸時代に足の悪い人に対する御利益で知られ、天龍寺（埼玉県飯能市）由来で誕生したという「子権現」（住吉町）は、明治時代初期に間島（間嶋）神社と改称しましたが、現在でも「権現様」と呼ぶ人がいます。お札群からは、こうした呼び名の原点ともいうべき、現在では失われてしまった神仏の名前を確認できます。さらに、江戸時代と現在の信仰を比較するための、貴重な資料といえるでしょう。　（佐藤智敬）

〒 183 – 0026 東京都府中市南町 6 – 32
TEL 042 – 368 – 7921
府中市郷土の森博物館
https : //www.fuchu-cpf.or.jp/museum/